

ウェルギリウス『アエネーイス』結びの問題

——和解か復讐か——

筒 井 賢 治

1. ウェルギリウス『アエネーイス』の結び

「西洋の父」¹⁾とも称される古代ローマの詩人ウェルギリウス（70-19 B.C.），その未完の代表作『アエネーイス』全十二巻は，次のような詩句で結ばれている。一騎打ちで敗れて戦闘不能になった敵将トゥルヌスと主人公アエネーアースとの間の，壮絶なやりとりである（12,930-952）。

トゥルヌスは，ひざまずいたままの低い姿勢から，嘆願のまなざしを向けて右手を差し出し，「私は報いを受けた。命乞いはしないと話しはじめる。

「おまえの権利だ。好きなようにせよ。もし惨めな父親への思いがお前の心に触れるならば，お願いする。お前にも同じような父親アンキーセースがいたのだから。老いた（わが父親）ダウヌスを憐れんでくれ。そして私を，望むなら命の光が奪われたあとの死体であっても構わないから，家族のもとに返してくれ。

おまえが勝ったのだ。負けた私がこうして嘆願するのをイタリア勢も見届けたのだ。ラーウィーニアはおまえの妻だ。これ以上，憎しみを続けるな。」

戦にはやっていたアエネーアースだったが，目線を切り，（剣を握る）右手を押しとどめた。そして，このトゥルヌスの言葉が次第にアエネーアースを躊躇させ，気持ちを動かしはじめた。

と，その時，トゥルヌスの肩のてっぺんに，不幸なあの剣帯が見えた。若いパッラスのベルトの，あの見慣れた留め金きらめいたのだ。傷を負わせて倒したパッラスから奪ってトゥルヌスが肩

からさげていた、あの憎むべき勲章である。

アエネーアースは、残酷な悲しみを思い出させるこの戦利品を目にするや、狂気に燃え上がり、怒りで恐ろしい声をあげる。

「わが仲間から奪った戦利品を身につけたおまえが、ここでわたしに見逃してもらえるというのか。パッラースがこの傷で、パッラースがおまえを屠るのだ。そして邪悪な血を流して、罪の償いをさせるのだ。」

こう言いながら、勢いも激しく、剣を胸の奥へとまっすぐに突き立てる。

すると、トゥルヌスの肢体は冷気で力を失い、生命は、怒りつつも、うめきとともに死者たちの世界へと去っていく²⁾。

簡単に、それまでのストーリーを紹介しておく。アエネーアースは、トロイア戦争に敗れて故国トロイアを神命に従って脱出し、第二のトロイアすなわちローマを建国するべくイタリアに到着する。この計画を阻もうとする土着勢力の中心がトゥルヌスであり、上の一騎打ちでこのトゥルヌスが敗れることによって、新国家建設への障害が最終的に取り除かれることになる。したがって、これをもってローマ建国物語としての『アエネーイス』も完結する。

パッラースは、イタリア出身でありながらアエネーアースの味方につく若い將軍だが、上の場面に先立つ『アエネーイス』第十巻においてトゥルヌスと一騎打ちを行い、殺される。その時、トゥルヌスは、倒れたパッラースから剣帯を奪い取り、自分の身につけてしまう。思い上がりから出たこの軽はずみな行為が、上の最終場面において、トゥルヌスの命取りになる³⁾。トゥルヌスの言葉によって心を動かされているアエネーアースに、パッラースの仇をうつという責任を思い出させてしまうからである。

つまり、ごく図式的にまとめるなら、一騎打ちに勝ったアエネーアースは、負けを認めた敵将トゥルヌスの懇願に心を動かされるも、味方つまりパッラースの仇討ちを思い出して、トゥルヌスにとどめをさす。これが『アエネーイス』の最終場面である。

本稿は、これまでさまざまな論議を呼んできたこの箇所について、それがどのような歴史的・文学史的にどのような問題をはらんでいるのか、

そしてどのような文脈ないし地平で議論されるべきなのかを、これまでの研究史を簡単に振り返った上で、改めて重要な問題として提起することを目的とする。

2．問題点

この『アエネーイス』結びの部分は、今述べたように、これまでさまざまな議論を呼び起こしてきた。根本的な問題は、「負けを認めている無抵抗の相手を殺すことが許されるのか」という点に集約することができる。おそらく、『アエネーイス』を知らない人でも、このような疑問を——少なくとも、言われてみれば——抱くだろう。そして、この作品に詳しい読者であれば、同書第六巻において、次のような言葉が書かれていることを思い出す（6,851-853）。

おまえは、ローマ人よ、諸民族を命令によって支配するのだ。これこそが、おまえの技術なのだ。そして、平和に規則を課すのだ。つまり、従属する者には寛容であり、傲慢な者は打ち負かすことだ⁴。

『アエネーイス』第六巻は、トロイアから放浪を重ねてやっとイタリア半島に到着したアエネーアースが、その時点ですでに没していた父親アンキーセースから将来の予言を聞くべく、冥界に降るという局面を内容としている。上の三行は、そのアンキーセースが息子アエネーアースに対して説く、いわばローマ人の心得である。彫刻術や天文学や弁論術（やその他もろもろの学問や技術）は他の民族の特技として任せておき、ローマ人は、そうした各民族を命令ないし権力（imperium）によって仕切れ、それがローマ人の使命なのだという意味である。

これは、明らかに、『アエネーイス』の舞台である（伝説的な）トロイア戦争直後の時代からは遠く離れて、作者ウェルギリウスがこの作品を書いていた時代、すなわちローマ帝国の最初期という時代から理解すべき言葉である。年表的にいうなら、初代皇帝アウグストゥスの「就任」が前二七年、ウェルギリウスの死すなわち『アエネーイス』の公刊が前一九年である⁵）。アンキーセースがアエネーアースのことを「ローマ人よ」と呼んでいるのも、聞き手ないし読者がここでアエネーアース

に「現代」のローマ人を、特にはその第一人者たるアウグストゥスを重ねあわせて解釈することをうながす、わざとらしいほど意図的な時代錯誤である。簡単にいえばローマによる世界帝国支配のイデオロギーが表明されているわけだが、それだけにこの言葉は、ポジティブな意味でもネガティブな意味でも、後世において非常に頻繁に引用されることになる⁶⁾。

さて話を戻せば、ここでアンキーセースはアエネアースに対して「従属する者には寛容」であることを命じている。そこで、屈服したトゥルヌスをアエネアースが詩の最終場面において殺害したのは、このアンキーセースの命令に対する違反であるように見える。つまり、単純な印象からだけでなく『アエネーイス』内部からも、結びの場面における主人公の振舞いは、許し難い暴挙であるように思えてくるのである。

3．解釈の歴史

この問題が特に注目を浴びたのは、最近、といっても前世紀になるが、「不敬虔なアエネアース」というキャッチフレーズで提起された考え方である。これは、『アエネーイス』において定型的に使われている「敬虔なアエネアース」(pius Aeneas)という言葉を手にとり、アエネアースの正体は実は「不敬虔」であった、それをアエネアースは最後の場面で暴露してしまった、とする解釈である。これは、とりわけ、ベトナム戦争を抱えていた当時のアメリカにおいて、厭戦気分や反戦運動とも結びついていったらしい⁷⁾。

さらに、著者ウェルギリウスと主人公アエネアースを区別するという(それ自体は当然の)視点をこれに組み込んで展開されたのが、「二つの声」という理論である。それによれば、作者ウェルギリウスは、自分の作品の主人公アエネアースにあえて過ちの行動をとらせたのだという。そこから、主人公の華々しい戦功そして新しい国家の建設という「表の声」「対外的な声」と別に、それをネガティブに見ている平和主義者・反帝国主義者たる詩人ウェルギリウスの「裏の声」「プライベートの声」を読み解いていこうという方法論が発生し、展開されていったのである⁸⁾。

もちろん、伝統的な立場、すなわち最終場面のトゥルヌス殺害をネガ

ティブな目では見ない研究者も多く、その立場から、「不敬虔なアエネーアース」や「裏の声」といった議論に反対する研究も多く出されている。これらは、一方においてトゥルヌスが殺されてしかるべき人物であること、正確に言えば、そのような役割をトゥルヌスは『アエネーイス』において負わせられているのだということを指摘し、他方において、無抵抗の敵を殺すことに対する嫌悪感はキリスト教的な道德の産物であって、それ自体の是非はどうであれ、キリスト教以前の文献である『アエネーイス』にそれを読みこんではならないという点を強調する。何であれ、文学作品はその時代から理解されねばならないという原則である⁹⁾。

さて、そこから、今度はトゥルヌスという人物に焦点を定めた議論が始まることになる。トゥルヌスは、本当にそのような、死刑になって当然の悪人として描かれているのだろうか？ この問題は、ウェルギリウスへの関心が不当に低い日本において、比較的盛んに議論されているトピックの一つである。おそらく、それは日本の西洋古典学において非常に大きな足跡を残した故・岡道男がこのテーマでひとつ論文を残していることと関連しているのであろう¹⁰⁾。この論文において岡は、トゥルヌスを単純に断罪するような議論を逐一退けた上で、トゥルヌスはその最後の科白をもって「ホメーロスの英雄からローマ的な英雄に」変貌したのだという¹¹⁾。敵であったとはいえ、作者ウェルギリウスは聴き手ないし読者がトゥルヌスに共感を抱くこと、過去のいきさつを、怨讐を乗り越えたレベルから捉えなおすことを迫っているのだというのである。

『アエネーイス』を詩人が生きた時代の枠内で理解すべきだとしればいわれる。この叙事詩を詩人の時代的背景のもとに理解する必要性はここで改めて強調するまでもない。だからといって、彼は同時代人だけを対象として『アエネーイス』をつくったと考えるなら大きな誤りである。彼はなるほどアウグストゥス治世下のローマにふさわしい国民的叙事詩をつくることを意図した。しかしそれは同時にアウグストゥスの治世の約束する「永遠のローマ」にふさわしい叙事詩でなければならなかった。いいかえればそれは人間を狭隘な時代的偏見から解放して普遍的人間の世界へ導く詩である。評者

によってしばしば「戦争犯罪人」「国家の敵」などとよばれるトゥルヌスの解釈においてもこうした詩人の真摯な意図を誤解することがあってはならない¹²⁾。

我々は、トゥルヌスに関する解釈は別にしても、ウェルギリウスの創作意図について、ないしは我々が『アエネーイス』に接する際の心構えについて、このような見解をとらない。いかなる作家に、いやいかなる人間に、「人間を狭隘な時代的偏見から解放して普遍的人間の世界へ導く」ことができようか。そもそも、「時代的偏見」というような発想ないし概念が、ウェルギリウスにあったのだろうか。

ともかく、これを受けて、日本でもトゥルヌスないし『アエネーイス』末尾の問題についての論考が幾つか発表されている。もちろん、欧米でも論争は続けられている¹³⁾。

4．疑問点

さて、このような研究状況に対して、どのように我々は応えるべきであろうか。まず前項の最後に挙げたトゥルヌス集中型の議論に対しては、それだけでは『アエネーイス』末尾の問題と十分にかみあわないという点を指摘しなければならない。たとえば岡の所説では、トゥルヌスが最大限ポジティブに評価される一方で、ではそのトゥルヌスをアエネーアースが殺すという点をどう考えればいいのかという問題に、全く答えがない。「ローマ的英雄」へと自己変革を遂げたばかりの好青年トゥルヌスを殺してしまうアエネーアースは、やはり悪者だったということになるのだろうか。とすれば、議論は「不敬虔なアエネーアース」に戻ってしまう、いわば振り出しに戻ってしまうことになる。

他の研究者も含めて、トゥルヌスに集中する場合、どうしても、そのトゥルヌスがアエネーアースに殺されるという肝心の一点が視野から抜けおちてしまう傾向があるように思われる。ここで私見を述べるなら、『アエネーイス』におけるトゥルヌスには個人としてのアイデンティティーが欠けている。この点、カルタゴの女王ディドーのような大物のみならず、従者アカーテースのような脇役にもまして、トゥルヌスの存在感、というより実在感希薄である。逆にいえばトゥルヌスは、一方

ではローマ建国がトロイア人による一方的な現地人征服という図式では描かれてないこと¹⁴⁾、他方で戦闘や決闘の場面がなければ——とりわけホメロス『イーリアス』を範とする(後述)——叙事詩として成り立たないこと、という本質的に矛盾する二つの要請の間で、土着勢力の一部を代表して殺されるという苦しい役割を押しつけられた、というよりそのために案出された人物であるようにさえ感じられる¹⁵⁾。

しかしこの点は、『アエネーイス』における人物造形という別のテーマとも、またこの作品が——とりわけ後半部において——未完成であるという問題ともからむので、ここで断定するのは避けておきたい。ともかく、トゥルヌスをウェルギリウスがどのように描いているのであろうと、結局は、アエネーアースがその彼を、しかも嘆願の姿勢に入っている彼を殺すという設定をどう考えるか、その点に問題が戻ってくる。

それでは、最終場面のアエネーアースは、「不敬虔なアエネーアース」や「二つの声」論者の考えるように、過ちを犯したのだろうか。父親の命令に背いたのだろうか。より厳密に言うなら、そのような結末を作者ウェルギリウスは意図して書いたのだろうか。

われわれは、とうていそのようには考えることができない。トゥルヌスが第十巻でパッラースの剣帯をはぎとって自分の肩にさげたこと、それを詩人は、詩人自らの声として、重大な過ちであると宣言していた(501行以下)。

運命を知らない、来るべき定めを知らない、順境に舞い上がって節度を守ることを知らない人間の心よ！ 手を触れないままのパッラースを大金を払ってでも買い戻したいと願う日が、この日のこの戦利品を憎むことになる日が、トゥルヌスを訪れることだろう¹⁶⁾。

倒れたパッラースに対してトゥルヌスがとった行動は、それ自身が傲慢な所行であるがゆえに、重大な過失である、トゥルヌスはそれを必ずや身をもって後悔する——詩人自らがこのように語っている以上、過ちを犯したのはトゥルヌスであってアエネーアースではないということに、疑いの余地はまったくない¹⁷⁾。

また、第六巻における父親アンキーセースの命令(既出)との関連でいうなら、そこでは「従属する者には寛容であり、傲慢な者は打ち負か

す」という二つがセットで書かれているのであって、どうしてここで多くの研究者が前半ばかりを持ち出すのかという疑問がある。傲慢な者は力で打ち倒すべきだ——我々がこれを個人的にどう感じようと、アンキーセースはそれを命じていたのである。トゥルヌスは最終的に屈服して負けを認めたのだから「従属する者」のカテゴリーに入る、というような論理は安易にすぎる。政治的な次元は度外視するにしても、今のトゥルヌスが「従属する者」なのか「傲慢な者」なのか、つまり、それまで傲慢であっても、従属した瞬間からそれまでのことは水に流されるのか、このあたりの明確な割り切りは難しい。また第十巻におけるパッラース殺害の場面との対応を考えても、トゥルヌスはパッラースに対して傲慢な態度をとったのであり、その精算は全く済んでいない。そしてアエネアースは、「パッラースがおまえを屠るのだ」と、明言をもって、パッラースに対する償いをトゥルヌスに求めているのである。アンキーセースの語った二者択一の図式をこの場面に適用するのなら、作者ウェルギリウスは、最後の最後までトゥルヌスを「傲慢な者」に分類しているのだと言うほかはない。

さらに、主人公を最後の最後で突き放してみせるという文学的手法だが、近現代ならいざ知らず、ウェルギリウスの時代にそれを想定するのは、そもそも無理であろう。作者が主人公を作品の途中で突き放してみせるという手法は、例えばウェルギリウス自身も、『アエネーイス』第四巻におけるディードーとのロマンスの場面で使っている¹⁸⁾。しかし、それはアエネアースが自らの使命を思い出すという成り行きをにらんだ上での演出、ストーリー展開の全体から見ると一種の——これもホメロスがすでに多用している伝統的な——「じらし作戦」であって、作品の末尾において使うようなものではない。

以上の理由からして、アエネアースのトゥルヌス殺害は正当であった、作者ウェルギリウスは本気でそのように作品を構想していたのだ、という結論は避けようがない。この基本的なコンセプトを十分に踏まえないままでトゥルヌス像を論じたり、あるいはトゥルヌスに同情できる点を探してみようとするような試みは、『アエネーイス』そのものを理解しようとする文献学の枠内では、不十分なものに終わることになる。

もちろん、『アエネーイス』のような本当の古典ともなれば、誰でも好きなように読んで構わないわけだし、実際、好き勝手な読まれかたを

されつづけて現在に至るのである。テキストが時代と世界を超えて何千年と読まれつづけるというのは、裏を返せば、そういうことなのである。これまで論じてきたような仕方では、最近の一部の研究者のうちでトゥルヌスが一定の「復権」を果たしたというのも、『アエネーイス』の龐大な「受容史」「影響史」の一コマである。

だが、話をずらすのは避けて、狭義の文献学、つまり各文献がもともとどのような形態・内容・コンセプトをもって成立したのかという問題設定の場に戻ろう。とりあえず、主人公アエネーアースがトゥルヌスを殺したのは正当であったという結論に達した。だが、これで問題が片づいてしまったわけではない。むしろ、まさにこの点から本当の問題が始まるのである。というのも、もしトゥルヌスの死が至極当然の結末であるのなら、これまでさまざまな論議がなぜ生じたのかの理由が説明できなくなるし、そもそも、『アエネーイス』の結末は、「つまらない」「ありきたりだ」「みえみえだ」ということになってしまいかねない。本当にそうなのだろうか。

結び場面のアエネーアースの行動を非難する議論に対して、すでに触れたように、それはキリスト教的な倫理観を持ち込んでしまう時代錯誤的な誤りだという指摘がなされている。しかし、これは必ずしも正確ではない。確かに、キリスト教の立場からトゥルヌス殺害を非難することは可能であろうし、実際、年代を確定できる中で最も古いアエネーアース批判は、4世紀初頭のキリスト教徒のラクタンティウスによるものである¹⁹⁾。しかし、古代のウェルギリウス注釈には、問題の結び部分について、次のような記述が見える。

セルウィウス

すべてがアエネーアースの榮譽につながっている。敵を赦そうと考えたということによって彼は敬虔（pius）であることが示され、敵を殺すということによって彼は敬虔さ（pietas）の勲章を身に帯びる。エウアンデル（＝パッラースの父親、引用者注）のことを考えて、パッラースの仇を討つのだから（引用者訳）²⁰⁾。

ティベリウス・ドーナトゥス

アエネーアースが動じないのは当然である。なぜなら、パッラース

を殺した人間に対して存命を許さないことの方が、身内の死の仇を討たないままにすることよりも大切だったからである。こうして、アエネアースという人物において、敬虔さ（*pietas*）とパッラースへの責務（*religio*）の両方が守られている。前者は相手を赦そうと望んだことにおいて、後者はパッラース殺害者が（復讐を）逃れなかったということによって（引用者訳）^{21）}。

ここで重要なのは、それぞれの解釈案が当たっているのかどうかではなく、『アエネイス』の最終場面は説明が必要な箇所であることを古代の注釈家たちが認識していたという点にある。セルウィウスは後四〇〇年前後、ティベリウス・ドーナトゥスは後四世紀に活動した文学研究家であり、キリスト教との接触はない。むしろ彼らは、キリスト教が公認されて一挙にその影響力が強まってからも、昔から綿々と続いてきたギリシア・ローマ文学研究の伝統を地道に引き継いだ人々（「文法学者」）である。特にセルウィウスには、一世代ほど前のアエリウス・ドーナトゥスという有名な学者^{22）}との接触が強く、またこのA・ドーナトゥスは、残存する『ウェルギリウス伝』において、二世紀のローマ史家スエトニウスの著作を利用していることが定説となっている。つまり、こうした状況証拠からして、セルウィウスやT・ドーナトゥスの著作は、彼ら自身の独創的研究成果というよりも、先輩学者たちから受け継いだ知見の集成という面がはるかに強いと考えられている。

とするなら、上の引用から証明される問題意識は、キリスト教とは無関係の、そして時代的にも四世紀以前からの、ギリシア・ローマ文学プロパーの人々にも共有されていたと推定できることになる。したがって、降伏して嘆願するトゥルヌスを殺してしまうアエネアースの態度は、キリスト教の価値基準とは無関係に、異教すなわちギリシア・ローマ古典時代の価値基準においても、正常ではない何か、説明を要する何かであると認識されていたことになる。言い換えれば、詩人ウェルギリウスその人が属していた伝統を前提にした上でもなお、『アエネイス』の結びは、提起されてしかるべき問題をはらんでいるはずなのである。

5．ホメーロス『イーリアス』

では、『アエネーイス』の結びが当時の読者に与えたであろう違和感
は、どこに由来するのだろうか。これを最も端的に示すためには、ホ
メーロスと比較してみるのがもっとも分かりやすく、また方法論的にも
適切であろう。というのは、ウェルギリウスが『アエネーイス』を書く
際に、ホメーロスの二大叙事詩『イーリアス』『オデュッセイア』を他
の何よりも強く意識していたことは、誰も疑わないことだからである。

ただ、この分野に詳しくない人のために簡単な説明をつけておこう。
一言でいえば、『アエネーイス』にはメーロスから借用した字句が無数
に見つかる。この点については『アエネーイス』が出版された直後から
批判があり、A・ドーナートゥス（もしくはスエトニウス）のウェルギ
リウス伝にも、そのことが記録されている²³）。しかし、これは単なる
剽窃や著作権侵犯のように考えるべきではなく、むしろ積極的な挑戦と
見るべきものであることが、今日では一般に了解されている。同じ言葉
を（もちろん、ホメーロスのギリシア語からラテン語に移しかえた上で）利用
しながら、それをホメーロスとどのように異なる文脈やニュアンスで使
ってみせるか、ホメーロスの言葉に、どのような形で新しい生命を与え
るか、そこにウェルギリウスの挑戦があった。より厳密にいうなら、ホ
メーロスに対するこうした挑戦も、ウェルギリウス以前からの伝統的な
姿勢であり、文学史的には、そうした挑戦から得られた最もみごとな戦
果が、この『アエネーイス』に他ならないということになる。

さて、巨視的にみるなら、『アエネーイス』の前半部（第一巻から第六
巻まで）はホメーロスの『オデュッセイア』を、そして後半部（第七巻
から第十二巻まで）は『イーリアス』を、それぞれ主たる模範ないし挑
戦相手として設定している。後半部の内容は、落城するトロイアを逃れ
出たからの放浪（＝前半部の内容）が終わり、新国家を建設すべき土地
イタリアに到着したアエネーアース一行が、トゥルヌスを代表とする土
着の抵抗勢力と闘って勝利を収めるまでの戦争物語である。その中の各
場面に、同じく戦記である『イーリアス』の各場面が重ね合わされるこ
とになる²⁴）。そして、アエネーアースによるトゥルヌス殺害の部分に
対応するのが、『イーリアス』の側でも、作品の実質的なエンディング

にあたる場面、すなわちアキレウスとトロイア王プリアモスとが直接に出会う場面である。ところが、『イーリアス』の方は、『アエネーイス』とは正反対に、両者が和解するのである。

しかしその前に、それまで『イーリアス』のストーリーを、本論に係る部分に限って、簡単に振り返っておこう。ギリシア連合軍が大挙してトロイア王国を攻め落としにかかる「トロイア戦争」の某日、ギリシア軍の内部で、総大将のアガメムノンと最強戦士のアキレウスが仲違いを起し、アキレウスとその手勢は戦闘から身を引いてしまう。そのためにギリシア軍は劣勢になり、崩壊の危機にさらされる。アキレウスの親友パトロクロスは、味方の窮状を見かねて、アキレウスの了解を得た上で戦闘に出て行く。しかしトロイアの最強戦士ヘクトールが、このパトロクロスを倒してしまう。

自分のせいで親友を死なせてしまったアキレウスは、怒り狂って再び参戦し、ヘクトールを一騎打ちで殺す。しかしそれでもアキレウスは怒りを解かず、ヘクトールの死体を戦車で引っ張りながらパトロクロスの墓の回りを走りつづけている。そこへ、ヘクトールの父親であるトロイアの老王プリアモスが、単身で、敵陣にアキレウスを訪ね、息子の死体を返してくれと懇願する。さて、このあたりから問題のシーンが始まる。

.....アキレウスは神に見まごうプリアモスの姿を見て仰天した。他の者たちも驚いて互いに顔を見合わせたが、プリアモスはアキレウスに語りかけ歎願するいうには、
「姿神々にも似たアキレウスよ、御尊父のことを思っていたきたい、年の頃はわたしほど、厭わしい老いの^{しきい}鬨に立っておられる御尊父のことを。恐らくは御尊父も、近隣に住む輩から悩まされておられるであろうが、苦難と破滅から衛ってくれるような人は一人もおられぬ。しかしあの方はあなたがご存命であると聞いて嬉しく思い、来る日も来る日もやがてはわが子がトロイエから帰って来るであろうと心待ちにしておられるに違いない。しかるに世にも不運なこのわたしは[...中略...]今わたしがアカイア勢の船を訪れたのは、そのヘクトールのため、彼の身柄をあなたから譲り受けたく、莫大な身の代も持参しております。どうかアキレウスよ、神々を憚るとともに、御尊父のことを思い起して、このわたしを憐れんでいただきたい

い。わたしは御尊父よりもさらに憐れむべき身の上、いまだかつて、地上に生を享ける人間の一人だに耐えたことのないほどの苦しい目にも耐えたのです——わが子を殺した人の顔の前に手を差し伸べるという……」

こういつてアキレウスに、老父への想いで泣きたいほどの気持ちを起こさせると、アキレウスは老王の手を取り、静かに押しやって、わが身から離れさせた。こうして二人はそれぞれの想いを胸に、こちらはアキレウスの足下に腹這いになって、勇猛ヘクトルのためにさめざめと泣き、アキレウスはわが父を、またパトロクロスをと代わる代わるに偲んでは泣いて、二人の泣き声は陣屋中に響きわたった（24,483-512）²⁵）。

一言補足するなら、アキレウスは、自分がもはや生きて父親に会うことはないこと、自分はトロイアで死ぬ運命にあるということを知っている。それを知らずに語っているプリアモスの言葉は、それだけますますアキレウスの「老父への想い」（507）を掻きたてることになる²⁶）。

予期しないこのような老王の態度を見て、二人して嘆きつくした後、アキレウスはプリアモスの手をとって助け起こし、和解の声をかけ、ヘクトールの遺体を返すことを承諾する。さらにはヘクトール葬儀のための休戦協定も、アキレウスの方からプリアモスに提案する。『イーリアス』の最後のシーンは、ヘクトールの葬儀である。だが、「怒りを歌え、女神よ、ペーレウスの子アキレウスの、おぞましい怒りを」という『イーリアス』冒頭の名高い言葉を考えるなら（1,1-2）、その怒り——アガ멤ノンに向けられた最初の怒りから、ヘクトールや自分自身に向けられた怒りへと様相を変え、増幅されてきた怒り²⁷）——が最終的に解かれるシーン、すなわちアキレウスとプリアモスの対話の場面こそが、『イーリアス』の結びであるといって差し支えない。

それならばなおさら、話を戻すが、『アエネーイス』の結びと『イーリアス』の結びとは密接に関連していそうだと予想できるわけだが、はたして、本稿の冒頭に挙げた『アエネーイス』の該当部分には、いやでも『イーリアス』を想起させる言葉が書かれている。トゥルヌスがアエネアースに向けて語る科白である。

おまえの権利だ。好きなようにせよ。もし惨めな父親への思いがお前の心に触れるならば、願ひする。お前にも同じような父親アンキーセースがいたのだから。老いた（わが父親）ダウヌスを憐れんでくれ（12,932-934）。

負けを認める「おまえの権利だ、好きなようにせよ」までの言葉に続けてトゥルヌスが「父親」というモチーフで嘆願を始めるのは、明らかに、『イーリアス』においてプリアモスがとった方法を、聴き手ないし読み手に連想させるための仕掛けである。ウェルギリウスが『アエネーイス』においてホメーロスを利用していることについてはすでに触れたが、無数にあるそのような例の中でも、ここはおそらく最もそれが明瞭な箇所であろう。結びの箇所同士が対応しているということで、ある意味、「わざとらしい」というような印象を——とりあえず——抱いた読者や聴き手がいたかもしれない。

もちろん、プリアモスは父親の立場で、トゥルヌスは息子の立場で嘆願しているという違いがあるし、また嘆願を受ける側も、アキレウスの父親が存命しているのに対してアエネーアースの父親アンキーセースはすでに死去している（そしてそのことを相手方も知っている）という相違もある。

しかし、嘆願者の側が、息子（アキレウス／アエネーアース）が父親（ペーレウス／アンキーセース）に抱く特別な感情に訴える作戦をとるという構図は、全く同一である。アンキーセースがすでに死んでいるという点だが、トゥルヌスは「お前にも同じような父親アンキーセースがいたのだから」と完了形で言わざるを得ず（*fruit* 934）、論理ないし説得力の面で多少の不自然さがある。それでも、ウェルギリウスは強引に『イーリアス』の結びを『アエネーイス』の結びで利用したのである。

だが、それは決して猿真似ではない。なぜなら、決定的な一点において、ウェルギリウスはホメーロスを変更したのである。それは、アキレウスと異なって、アエネーアースは嘆願を受け入れなかったという点である。無理をしてまでウェルギリウスが作品の最後で『イーリアス』の結びを模倣したのは、結末の違いをそれだけ印象的に演出するためだったのであろう。父親に免じて云々という嘆願をトゥルヌスが始めたとき、聴き手や読者は（少なくとも初回は）ただちに『イーリアス』を連想

し、二人が和解してハッピーエンドだなという予想を立てる。それが見事に裏切られる。嘆願が終わってから詩の行数にしてわずか十数行の後、トゥルヌスは死んでいる。

本章は、『アエネーイス』の結びが同時代ないし直続する時代の人々に対して提起した問題とは何だったのかを突き止めることを目的としていた。それは、とりあえず、「どうしてホメーロスと違うのか」という問題であっただろうと考えられる。言い換えれば、「どうして和解はなかったのか」という疑問である。そこで、次に「和解」という問題について、ウェルギリウス以前におけるギリシア・ローマ文学の伝統を見てみることにしよう。

6．ギリシア・ローマ文学における「和解」

「これ以上、憎しみを続けるな」(12,938)、これがトゥルヌスの最後の言葉であった。憎しみを解く、つまり和解するというモチーフは、繰り返しになるが、まさに『イーリアス』の主題であった。『イーリアス』は西洋文化における最初の文学作品であり、いずれの文化圏であれ、文学として最初に登場した作品の性格が、のちのちまで、その文化圏における文学の性格を規定しつづけることになる。なぜなら、最初の作品が、模倣対象としてであれ挑戦の対象としてであれ、以降の時代に対して直接間接に影響力を行使しつづけるからである²⁸⁾。

少々図式化がすぎるかもしれないが、それでも、ギリシア・ローマ文学に関する限り、やはり『イーリアス』が和解の文学であったという点は、後々まで、強い影響を及ぼしつづけた。幾つか、そのサンプルを拾ってみよう。

三大悲劇詩人のうちで最初の人物であるアイスキュロス（前5世紀前半～中葉）は、「オレスティア」とよばれる（残存するものとしては唯一の）三部作において、血で血を洗う復讐の連鎖にどのようにしてピリオドを打つか、という問題を扱っている。トロイア戦争の総大将アガメムノンを、妻クリュタイムネストラとその情夫アイギストスが、凱旋帰国の当日に殺してしまう。この二人を息子のオレステース（とエレクトラ）が殺して父親の仇をとるが、これによってオレステースは母親殺しを犯したことになる。怨霊の女神たちエリーニュエスがオレステースにとりつ

いて、彼を苦しめる。いわば、クリュタイムネストラの仇をとるという役を、人間に代わってエリーニュエスが務めるという構図である。

さて結末だが、三部作の最後をしめる『慈しみの女神たち』（『エウメニデス』とも呼ばれる）の結びの場面、アテナイで裁判が行われる。被告はオレステース、原告はエリーニュエス、被告の弁護を勤めるのは、父親の仇をとるべしという神託をオレステースに下していた神アポローン、そして女神アテーネーが裁判官である。裁判は、アテーネーの判断で、オレステースは無罪ということになる。エリーニュエスは、アテーネーの説得を受け入れ、今後は改名して「慈しみの女神たち」（エウメニデス）となり、アテナイの町を守護することになる。

これだけでは、神話の世界と現実世界（アテナイという都市）とがごっちゃになった支離滅裂な話に見えてしまうが、そこには、血による復讐という原始的で野蛮な慣習を克服し、紛争は裁判つまり理性によって解決するという制度を確立したのだという都市国家アテナイの文化的な自負がある。アイスキュロスは、それを誇らしく代弁しているのである。ホメロス以来の問題、人間が怒りを捨てて和解に踏み切るにはどうすればいいのかという問題は、アテナイという共同体において、ついに社会的なルールとして解決した。そして、この先進的な社会制度を実現したアテナイこそ、ギリシア世界（ヘッラス）のリーダーとしてふさわしい——「オレスティア」が上演されたのは前四五八年とされているが、まさに「黄金時代」に差し掛かろうとしていたアテナイのこのような誇りと自覚を、アイスキュロスは三部作の結びで表明したのである。

ごく最近発表された論文²⁹⁾において、丹下和彦は、『慈しみの女神たち』は「アテナイ市民自らのもつアルカイズム、その克服への賛歌に他なりません。私怨の追求者であったエリーニュエスはエウメニデスとなり、ポリス全体の悪の監視役へと変身します。ここにわたしたちは、法を基盤とする新しい市民社会の誕生を寿ぐ詩人の姿を垣間見ることができるのです」と記している³⁰⁾。基本的にはその通りであろう。ただ、ここで「アテナイ市民自らのもつアルカイズム」という限定的な表現をするのは適切なのだろうか。むしろ、怨念の女神エリーニュエスに追われて各地を放浪してきたオレステースがやっとのことで救いを得た土地、それが他ならぬアテナイであったという設定は、ギリシア世界全体の

アルカイズムすなわち原始的な習慣を、アテーナイこそが他国に先駆けて克服したのだという主張を示しているのではないだろうか³¹⁾。

それはともかくとしても、もう一点、決着が力ではなく裁判によってもたらされるという点だが、それが実際には明確な判決ではなく、両方の顔をたてる「和解」という形で下されるということを見のがしてはならないだろう。もちろん、素材が神話伝説（オ레스テース）や民間信仰（エリーニュエス）に由来するものである以上、作家が全く自由な創作を行うのは不可能である。オレステースを死刑に処したり、エリーニュエスを冥界の奥底に幽閉したりするわけにはいかない。しかしそれでも、『慈しみの女神たち』の最後は、まさに手放しのアテーナイ賛歌である。

女神アテーナーの国びとには、お供えの灌ぎの品も〔女神の方々の祠には未来永劫にわたって明かりも絶えず、〕このようにして、すべてを見守るゼウスとモイラとがひとつになってご加護を垂れたもう。今こそ、私たちの歌に合わせて、喜びの声を挙げるがよい（1044行以下）³²⁾。

このようにアイスキュロスは、少なくとも「オレスティア」上演の時点において、心底から、アテーナイの文明化した社会制度を信じ、アテーナイにバラ色の将来を見ていたのであろう。

三大ギリシア悲劇詩人としてアイスキュロスに続くのは、一世代あとのソフォクレスである（ただし三番目のエウリピデスとは同世代）。この作家も、「和解」のモチーフを扱う悲劇を書いている。『アイアース』がそれである。怒りの主体がアイアース個人に集中しているため、アイスキュロスの「オレスティア」よりも、『イーリアス』との比較が行いやすい。ただし、『アイアース』のアイアースは、『イーリアス』のアキレウスとは異なり、最後まで和解を拒む。そして、それによって破滅する。

ストーリーはおおよそ次の通りである。死んだアキレウスの武具を誰が相続するかでアイアースとオデュッセウスが争い、オデュッセウスが勝つ。それ以来オデュッセウスを憎みつづけているアイアースは、ついに、オデュッセウスや他のギリシアの將軍たちを皆殺しにしようと考えている。これを知った女神アテーナーは、アイアースを狂わせる。そのためアイアースは、ギリシアの將軍たちを殺しているつもりで、実際には家

畜を次々に殺すだけである。

正気に戻ったアイアースは、自分が見せてしまった醜態を恥じ、心配する周囲の人々を騙してひとり海辺に行き、自殺する。

ギリシアの將軍であるメネラオス、そして総大将アガメムノン、自分たちを殺そうとしたアイアースを反逆者とみなし、アイアースの埋葬を禁ずる。しかし、アイアースが狂って家畜を殺すところからすべてを（アテーネーの差し金で）目撃していたオデュッセウスが二人を熱心に説得し、仇敵であったアイアースの埋葬を許可させる。

この『アイアース』という作品は、ソフォクレスの残存七作品の中では最も初期のものと考えられ、これに続く『アンティゴネー』と共に、劇作技法上の難点が指摘されている。というのは、『アイアース』の場合、主人公であるはずのアイアースは劇の途中で自殺してしまい、その後はオデュッセウスの劇になってしまう。『アンティゴネー』についても事情は同様で、主人公であるはずのアンティゴネーは劇の途中で自殺してしまい、その後はクレオーンの劇になってしまう。つまり、作品が二つの部分に分裂してしまっていると批評されるわけである。これらと較べて、内的に完璧な統一体として作られたギリシア悲劇作品最高峰が『オイディプス王』なのだという評価になる。

しかし、形式的な問題はさておき、『アイアース』にしても『アンティゴネー』にしても、それなりに見事な仕方では筋の通った作品になっている。さらに言うなら、前者の本当の主人公はオデュッセウス、後者においてはクレオーンだと考えれば、「主人公」が途中で消えるという非難は当たらなくなる。しかし、「主人公」という概念がそもそもギリシア悲劇において定義されうるものかという根本的な問題もはらむので、ここでは示唆だけにとどめておく。

話を戻して『アイアース』だが、結びの部分、アイアースの埋葬許可をオデュッセウスが勝ち取ったあと、アイアースの異母兄弟であるテウクロスという人物とオデュッセウスとの間に、次のようなやりとりがある。

オデュッセウス

さあテウクロスに今こそ申し述べよう。以前に敵であったほどに劣らず、これよりのち、友であることを。そして今は亡き人（＝アイ

アス、引用者注)の葬儀にともに加わり、世に類ない武人^{もののふ}のために
尽くされるべき礼のなにひとつ、残ることのないように手を貸した
い³³。

テウクロス

万人の鑑^{かがみ}オデュッセウス、あらゆる点でわたしは称賛を捧げずには
おれない。わたしの懸念もまったくの杞憂であった。アルゴス人
(=ギリシア人、引用者注)じゅう最大の敵であるあなたひとりが援
助の手を差し伸べてくれて、この場に臨み生ある身に奢って死者を
辱めようとしなかった……(1376行以下)

オデュッセウスだけに死んだアイアースの味方をさせ(テウクロスを除
いて)、メネラオスやアガメムノンというもともと中立的な人物をアイ
アースの敵方に回すという設定は、明らかに、作者ソフォクレスの意図
によるものである。つまり、ソフォクレスは、アイアースへの態度を一
八〇度変えたオデュッセウスにスポットライトを浴びせ、その姿勢を必
死に肯定している。「憎しみの深さを友情に変える」というようなこと
が可能だろうか？ それが現実的に不可能であるように見えれば見える
ほど、オデュッセウスにそう言わしめたソフォクレスのメッセージ、和
解というものへのこだわりが浮き彫りになる。

この点をさらに明らかにするのが、アイアースの吐く科白である。混
乱を避けるためにあらかじめ断っておけば、これはアイアースの本心で
はなく、アイアースが自殺するのではないかと心配している家族を安心
させるための方便、つまりは嘘である。

雪吹きつのる冬の嵐も、しりぞいて稔りの夏にところを譲り、終り
ない夜の歩みも、白馬の日輪にその陽光を輝かしめる。吠えたける
疾風もやがては海原のうなりをしずめ、また抗いがたい眠りの力も、
いつしかそのいましめを解き、果てしなく獲物を捕えておきはしな
い。とすればわれわれ人間が、どうしてこの理(ことわり)をわき
まえずに済むであろうか。なぜならいまおれは思い知ったからだ。
敵は憎むべきもの、しかしその敵がいつか友となる日があることを
忘れてはならぬと。また、友に尽くして助けとなる時も、それが永

遠の友でないことを心得たいと思う。多くの人間にとって友情とは、
身を寄せるべき港ではないのだ（670行以下、傍点引用者）。

このような心にもないことを言って周囲を安心させたアイアースは、実際には敵に対する憎しみを忘れようとはせず、海岸で、ヘクトールから受け取った剣の上に突っ伏して自殺するのである。が、劇の進行とともに、アイアースの姿勢がオデュッセウスの姿勢によって価値評価的に押しのけられることで、すなわち、いわば二重の否定を経て、上の言葉はそのまま作者ソフォクレスからのメッセージだという位置づけになる。人間は、折れるべき時には折れなければならない。いつまでも強情を張ることは、人間として許されない。

このように、『アイアース』という劇は、前半部分におけるアイアースがネガティブな形で、後半部分におけるオデュッセウスがポジティブな形で、しかし同じことを訴えていると見なすことができる。さらに、オデュッセウスは最初から舞台に登場してアイアースが狂わされる様子を見ているのだから、劇作品として、十分に統一的かつダイナミックに構成されていると言えるのではないだろうか。ついでに言うなら、劇の冒頭、アイアースの狂乱を目にしたオデュッセウスは、女神アテネーに対して、次のような言葉を漏らしていたのである。

それにしても敵とはいいいながら、哀れを覚えます、（アイアースは、引用者注）恐ろしい禍いの軛にいやおうなしにつながれているのだから、思えばあの男の身の上は、すなわちわたしの身の上。われらの生はしよせん夢まぼろし、むなしい影に過ぎないのだ（121行以下）。

一つ前に挙げたアイアースの（本心を偽った）発言の中に、「いつかは憎むとおもって愛せ、いつかは愛すると思って憎め」という考え方が見られる。これは、遅くともソフォクレスの時代からローマのキケロの時代まで³⁴）、そしてそれ以降においても、かなり広く知られていた格言であっただろう。キケロは、とりわけポンペイウスを倒して全権を掌握した後のユリウス・カエサルに対して寛恕（clementia）を呼びかける一連の演説の中で、敵を赦して和解することを繰り返し称賛している――

なぜなら、人間を救い生命を与えるときほど、人間というものが神々に近づく場合は他にないからである（『リガーリウス弁護』38）^{35）}。

心に打ち克つこと、怒りを抑えること、敗者に相対するに穏和をもってすること、敵手が家名の高さにおいて、資質において、美德において、傑出している場合、その者を一敗地にまみれた状態から立ち上がらせてやるばかりか、そのかつての威信を増し加えてさえやること——こういったことを行おうとする者を、私は最高の人物に数えたりはしない。神に最も似かよった人物と判定する（『マルケッルスのための感謝演説』8）^{36）}。

つまるところ、「和解」を善いものとする思想は、ホメーロス以来、ウェルギリウスの時代まで、そしてもちろんそれ以降も、西洋古代世界において息づいていた。こうした例は、ここではアイスキュロス、ソフォクレス、そしてキケロというわずかなサンプルしか取り上げなかったが、他にいくらかでも見いだされるに違いない。このような伝統の源泉、それをただホメーロス一人に帰するのは極論であろう。が、とりわけて文学の世界において、やはり『イーリアス』が根本的に「怒りから和解へ」というベクトルで貫かれていたことが、非常に重要なファクターの一つであったことは否定できないと思われる。

話の本筋からは外れてしまうが、「敵を愛せ」という言葉は、今日では、ただちにキリスト教の教えを連想させる。しかし、それ以前から、同じような考え方はギリシア・ローマ世界に存在した。おそらく、他の文化圏にも存在したであろう。他方、たとえナザレのイエス、いわゆる「史的イエス」が愛敵の教えを群衆に説いていたとしても、宗教団体となつてからのキリスト教会がこれをどのような形でどの程度実践していたのか、それは全く別の問題である。パウロの説く愛——特に「愛の賛歌」として第一コリント書一三章が有名になっている——は、教会員同士の愛、さまざまな個性をもつキリスト教徒を教会として一つに統合する原理としての愛である。敵であろうと友であろうと、人間であれば分け隔てなく愛するという博愛精神の起源はどこなのか、ぜひ知りたいと

ころだが、おそらく単純な答えは出ないのだろうし、出すべきでもないのだろう。

7. ウェルギリウスの決断

さて、以上に見たように、敵対者との和解というモチーフは、ホメーロスの『イーリアス』以来、ギリシア・ローマ世界において着実に受け継がれ、肯定されてきた。普通の人々も、「いつかは憎むとおもって愛せ、いつかは愛すると思って憎め」というような言葉を耳にしたことがあっただろう。とすれば、こうした「一般常識」ないし「社会常識」からも、そして特に『イーリアス』への挑戦という文学的な視点からも、ウェルギリウスが『アエネーイス』の最後の最後において『イーリアス』に真っ向から逆らい、常識的な和解の勧めを拒否したということ、そのことは重大な意味を帯びていると考えざるを得ない。しかも、先に述べたごとく結びの十数行をあえて『イーリアス』のそれと似せて——いうなれば——フェイントをかけることによって、ウェルギリウスは最後の大逆転をクローズアップさせた。トゥルヌスが死ぬだろうということは先に引用した第十巻のパッラース殺害の場面において詩人自らの言葉ではっきりと予告されていたわけだが、それがついに実現する段になって、あらためて、ウェルギリウスはこれほどまで印象的な演出を施したのである。

こうして、あえて大胆に言うなら、『イーリアス』以前、「オレスティア」以前の原始的な復讐原理を、ウェルギリウスは確信犯的に蒸し返した。この反動的にみえる決断を、詩人は主人公アエネアースにあえて下させたのである。本稿の最初の部分で述べたことだが、この結末を現代人のみならず古代の読者も予想外なものとして受け取り、説明の必要を感じたということ、以上のようなギリシア・ローマの文化史的経緯を考慮すれば、これは少しも不思議なことではない。

本稿の目的は、この点を確認することで尽きている。『アエネーイス』の結びが提起するのは、トゥルヌスがどういう人物であったとか、主人公アエネアースの中にどういう精神的な成長あるいは退化があったとか、そうした『アエネーイス』内部からの議論だけで解決できる問題ではない。ウェルギリウスは、『イーリアス』へのアンチテーゼという形

を借りて、ホメーロス以来の常識的な行動規範に対して真っ向から挑戦状を突きつけたのである。それなら、ウェルギリウスの手にはどういうカードが握られているのか。こうして、『アエネーイス』の末尾は、まず「その時代から作品を解釈する」という古典学の原則からも十分に正当化される問題を我々に提起しているのである。

後は、この問題と関連しそうな点を二つほど挙げて終わりとしたい。まず、和解を拒むという点で、『アエネーイス』には大きな前例があった。カルタゴの女王ディードーである。両者の見解の相違から、アエネーアースが船出するのと同時に、ディードーは自殺する（第四巻末尾）。その「傷跡も生々しい」ディードーと冥界で遭遇したアエネーアースは（6,450以下）、事情を説明して必死にディードーをなだめようとする。しかしディードーは一言も口にしないまま立ち去り、アエネーアースはただ、その姿を「哀れに思いながら」（476）見送ることしかできない。

このように、ウェルギリウスは「修復不可能な別離」とでも呼ぶべきモチーフを知っていた。『牧歌』においても、第一歌と第十歌、つまり歌集全体の枠組みをなす最初と最後の歌において、戻ることのない別れがテーマにされている。かつて故郷マントゥアの農地から追い出されたという経験が、もしその伝えが事実ならば³⁷⁾、後を引いているのかも知れない。いずれにせよ、和解のありえない現実というものを、ウェルギリウスは『アエネーイス』以前から詩作のテーマにしていた。共和制ローマ「内乱の一世紀」の後半を自分の目で見てきたウェルギリウスには、アウグストゥスが権力を掌握して「帝政ローマ」が始まって——本来、『アエネーイス』はアウグストゥスのもとで実現すべき新しい時代を賛美するために着手された作品だったにもかかわらず——、たとえばアイスキュロスが『慈悲の女神たち』で見せたような手放しのオプティミズムを共有することはできなかったであろう。

もう一つ、当然ながら、ウェルギリウスが『アエネーイス』においてハッピーエンドを避けたことの理由として、トゥルヌスの責任問題がある。アエネーアースは、「パッラースがおまえを屠るのだ」と言ってトゥルヌスを刺す（12,948以下）。アエネーアースの役割は死刑執行役人のそれである。ここには、『イーリアス』とは全く異なった役割分担の理解がある。アキレウスは、ヘクトールの死体をプリアモスに返す際、パトロクロスに向かって、「悪いけれどもヘクトールの死体は返す、その

代わり、プリアモスが持ってきた身の代をおまえにも分けるから、我慢してくれ」と言って了解を取る（24,592以下）。つまり、アキレウスは個人の裁量で動き、それをパトロクロスも個人の裁量で了解してくれることを期待している。

これに対してアエネーアースは、自分の裁量でトゥルヌスを赦すことを——それを一度は考慮するにもかかわらず、パッラースのことを想起させられることによって——拒否し、自らパッラースの代理人となってトゥルヌスに仇討ちを果たす。ホメーロスの英雄とは明らかに異なる行動原理が、ここで働いている。先に、「従属する者には寛容であり、傲慢な者は打ち負かすこと」というアンキーセースの指令（第六巻）を引用したが、まさにその後半部が、妥協なくここで執行されているのである。

セルウィウスとT・ドーナートゥスは、古注において『アエネーイス』結びを解説する際、期せずして両者とも *pietas* という言葉を用いた³⁸⁾。おそらく、これは彼ら以前の『アエネーイス』解釈の伝統に遡るのであろう。ともかく彼らは、アエネーアースがトゥルヌスを助命しようかと思ったという点に限定して、アエネーアースの *pietas* を見ようとしている。特にT・ドナートゥスの方は、パッラースに対する *re-ligio* という別の言葉をトゥルヌス殺害の方にあてることで、このことを明示している。だが、『アエネーイス』全編で *pietas* や *pious* という言葉が主人公のキャッチフレーズのように使われているという事情を考えるなら、この最終場面においても、アエネーアースの行動はその全体が *pietas* からの行動であると想定するのが自然である。

先ほど、ウェルギリウスは「復習原理を……確信犯的に蒸し返した」とか、「反動的な決断」を下したという言い方を用いた。しかしそれは、聴き手や読者の「常識」に対する挑発だと考えるべきである。結果的には流血の復讐が果たされるわけだが、その動機はもはや個人的な遺恨ではない。『イーリアス』以前に戻るようになって、上述のように、ここでは全く違う行動原理が働いている。この原理にとりあえず *pietas* という言葉をあてるなら、ウェルギリウスが『アエネーイス』末尾で目指したのは、『イーリアス』以来の和解の論理がもはやそのままでは通用しないこと、すなわち、アウグストゥスのローマにおいて、個人裁量の行動規範は *pietas* に基づく行動規範によって取って代わられるという

ことを，そこから導かれる実践的な相違を通して，印象的な仕方でも描き出すことにあったといえることができるだろう³⁹⁾。

とするなら、『アエネーイス』末尾の問題は，古典文献学の問題であるのはもとより，さらに西洋の倫理，社会，歴史，政治思想などの問題とも密接につながっている。『アエネーイス』全体がそうなのだといえそうですが，とりわけ，トゥルヌス殺害における「ウェルギリウスの挑戦」は作品全体の問題性を——すべてとはいわないが——特に凝縮した形で示しており，興味や関心の異なるさまざまな学生や研究者が共同で取り組むのに好適な問題地帯を提供してくれている。『アエネーイス』を，特にそのエンディングをどう見るか，古典学も含めて，それぞれの分野や立場からの意見やぜひとも交換したいものである。

注

* 本稿は，東京大学 21 世紀 COE プログラム「共生のための国際哲学交流センター」(UTCP)の若手研究者月例研究発表会における口頭発表(2003 年 5 月)に基づいている。当日に意見や感想を寄せてくださった教員や研究員の方々に，この場を借りて感謝の意を申し上げたい。

- 1) Th. Haecker, Vergil. Vater des Abendlandes, Leipzig 1931 参照。
- 2) Ille humilis supplex oculos dextramque precantem / protendens
'equidem merui nec deprecor' inquit; / utere sorte tua. miser te si qua
parentis / tangere cura potest, oro (fuit et tibi talis / Anchises genitor)
Dauni miserere senectae / (935) et me, seu corpus spoliatum lumine mar-
vis, / redde meis. vicisti, et victum tendere palmas / Ausonii videre; tua
est Lavinia coniunx, / ulterius ne tende odiis. 'stetit acer in armis / Ae-
neas volvens oculos dextramque repressit; / (940) et iam iamque magis
cunctantem flectere sermo / coeperat, infelix umero cum apparuit alto /
balteus et notis fulserunt cingula bullis / Pallantis pueri, victum quem
vulnere Turnus / straverat atque umeris inimicum insigne gerebat. /
(945) ille, oculis postquam saevi monumenta doloris / exuviasque hausit,
furiis accensus et ira / terribilis: tune hinc spoliis indute meorum / eripi-
are mihi? Pallas te hoc vulnere, Pallas / immolat et poenam scelerato ex
sanguine sumit. ' / (950) hoc dicens ferrum adverso sub pectore condit /
fervidus; ast illi solvuntur frigore membra / vitaeque cum gemitu fugit in-
dignata sub umbras. なお本論におけるウェルギリウスからの翻訳は，こ
の箇所に限らず，日本語としての直感的な分かりやすさを優先した引用者
訳である。
- 3) 剣帯(剣を吊すベルト)に限らず一般論として，倒した敵から武器を奪

うという行為がどうしてこれほどの報いを受けるのか、この点は明確でない。むしろ、勝者が敗者から戦利品として武具を奪うのは、ホメロス以来、当然の権利と考えられている。しかしウェルギリウスは、第十巻の当該箇所において、トゥルヌスの行為が非難に値すること、思い上がり起因する行動であることを強調している（後述）。歴史的ないし文学的な慣行と、『アエネーイス』におけるこの意味づけとの間の齟齬については、ここでは立ち入らない。本論で重要なのは、ウェルギリウスがトゥルヌスのこの行為をどのように意味づけようとしたか、その後のどのようなストーリー展開を望んだか、その点に絞られるからである。

- 4) Tu regere imperio populos, Romane, memento / (hae tibi erunt artes) pacique imponere morem, / parcere subiectis et debellare superbos.
- 5) したがって『アエネーイス』にはわずかに未完の部分が残っている。だが、以下、末尾部分は完成しているという前提で議論を進める。
- 6) アウグスティヌス（354-430）は、主著『神の国』の第一巻序文すなわち文書冒頭でさっそく「従属する者には寛容であり、傲慢な者は打ち負かす」という句を引用し、こうした理念そのものは否定しないものの、その実現は神の国においてのみ可能なものであり、ローマ帝国がそれを標榜したのは悪霊的な傲慢の産物なのだと指摘する（教文館版の『神の国』邦訳では第1冊 23-24 ページを参照）。時代が下るが、哲学者カント（1724-1804）の手書きメモによれば、この言葉は圧政の象徴である（I. Kant, Gesammelte Schriften, Akademie-Ausgabe Bd. XIX, Kants handschriftlicher Nachlaß VI, Berlin/Leipzig 1934, 597 ページ。なおこの情報は次注 Wlosok, Res ... の 420 ページ以下に基づく）。そして現代、ウェルギリウスの故郷マントヴァには「ウェルギリウス公園」なる（非常にさびれた）施設があってウェルギリウスの像が据えられているが、そこにもこの3行が刻まれている（ちなみに2行目の hae が haec という文法的に誤った語形で書かれている）。泉井久乃助が『アエネーイス』邦訳の後書き（岩波文庫版では下巻 447 ページ）に記しているところによれば、この像はムッソリーニを模したものだという。またこの翻訳の初出である筑摩書房「世界古典文学全集」第21巻（1965年）の「月報」に泉井が寄稿しているエッセイ「マントヴァのウェルギリウス」（1～3ページ）には、この銅像についてもう少し詳しい説明が記載されている。
- 7) 研究史について、詳しくは小川正廣『ウェルギリウス研究・ローマ詩人の創造』、京都大学学術出版会、1994年、15ページ以下（および対応する23ページ以下の注）、また Nicolaus Horsfall, A Companion to the Study of Virgil, Leiden 2000 の 192 ページ以下を参照。より「現場」に近い報告としては、Antonie Wlosok, Vergil in der neueren Forschung, in: A. Wlosok, Res humanae - res divinae. Kleine Schriften, hrsg. von E. Heck und A. Schmidt, Heidelberg 1990, 279-301（初出 1973）、また同著者による Der Held als Ärgernis: Vergils Aeneas, 同書 403-418（初出 1982年）。
- 8) 詳しくは小川前掲書 180 ページ以下、特に 184 ページ以下を参照。

- 9) とりわけ A. Wlosok, *Der Held ...* (上記注 7 参照) がこれを強調する。
- 10) 岡道男「ウェルギリウスの英雄像——『アエネイス』のトゥルヌスの死——」, 同『ギリシア悲劇とラテン文学』, 岩波書店 1995, 241-271 (当該論文の初出は中村, 松本, 岡編『ギリシア・ローマの神と人間』, 東海大学出版会, 1979 年)。
- 11) 岡, 前掲書 261 ページ。
- 12) 岡, 前掲書 271 ページ。
- 13) 日本では大芝芳弘「『アエネイス』のトゥルヌス像」, 地中海学研究 XII (1989) 49-76, Takayuki Yamasawa, *On the So-called "Abrupt-Ending" of the Aeneid*, 西洋古典論集 VIII (1990), 71-85, 小川, 前掲書の各所, そしてごく最近の高橋宏幸, 「ウェルギリウス『アエネイス』における「非情」」, 西洋古典学研究 LI (2003) 94-106. この高橋論文に, 最近の欧米における研究状況も紹介されている (特に注の 2 ~ 4 番)。
- 14) むしろ, 民族としてのトロイア人はイタリア人に吸収されることになる。12,791 以下におけるユピテルとユーノーの取引, とりわけ 828 のユーノーの科白を参照——「トロイアはその名称ごと滅んだ, 滅んだのだということにしてください」(Occidit occideritque sinas cum nomine Troia)。
- 15) もちろんトゥルヌス伝説はウェルギリウス以前からあるが, ウェルギリウスはそれを自由に改変している。これは, 同じくウェルギリウス以前から伝説のあるアエネーアースやディーダーなどにもあてはまる。W. Suerbaum, *Vergils »Aeneis«*, Stuttgart (Reklam) 1999, 201 ページ以下を参照。
- 16) 10,501-505: *Nescia mens hominum fati sortisque futurae / et servare modum rebus sublata secundis! / Turno tempus erit magno cum optaverit emptum / intactum Pallanta et cum spolia ista diemque / oderit.*
- 17) 上記注 3 を参照。また, トゥルヌスの不用意な行為が不運な巡り合わせで彼の破滅につながったというようなストーリー展開ではないのだから, トゥルヌスを伝統的な (アリストテレス的な) 意味における「悲劇」の主人公とみなすこともできない。
- 18) この間のアエネーアースからは「敬虔な (pius)」という定型句が外されている。これが詩人の意図的な演出であるということは広く認められている。
- 19) ラクタンティウス『神聖教理 (Inst. div.)』5,10,1 以下——「この男 (アエネーアース) に何か立派なところがあつたと考える者がいるだろうか? 怒りで藁束のように燃え上がってみたり, また (助命の) 懇願で引き合いに出された父親の霊のことも忘れて, 怒りを制することのできなかつたアエネーアースである。反抗しないばかりか嘆願している者たちを殺害したこの人物は, どうみても敬虔ではないのである」(引用者訳)。
- 20) Ad 12,940: *Omnis intentio ad Aeneae pertinet gloriam. nam et ex eo quod hosti cogitat parcere, pius ostenditur, et ex eo quod eum interimit, pietatis gestat insigne. nam Euandri intuitu Pallantis ulciscitur mortem.*

- 21) Ad 12,947-949: Recte immotus est. praestabat quippe interfectori Pal-lantis negare vitae beneficium quam inultam relinquere familiaris mor-tem. ecce servata est in persona Aeneae pietas, qua volebat ignoscere, servata religio Pallanti, quia interfector eius non evasit.
- 22) 聖書のラテン語訳, いわゆる『ウルガータ』(の一部)を手がけたヒエロニムス(ヒエローニウムス)も, このA・ドーナトゥスに学んだと伝えられる。また, よく知られているように, このドーナトゥスが著したラテン語文法書が中世においてラテン語の標準的な教科書となり, DonatやDonate という綴りの単語が西ヨーロッパ各国語において普通名詞的に「教科書」のような意味で使われるほどになった。
- 23) 「さらにクイントゥス・オクターウス・アウィートゥスの『類似箇所集』全八巻も, どの詩行をどこから(ウェルギリウスが)書き写したのかを内容としている」——Sed et Q. Octavi Aviti ὁμοιοτήτων octo volumina, quos et unde versus transtulerit, continent (VSD 45, ed. Karl Bayer in: Vergil. Landleben, Zürich [Artemis & Winkler], 6. Aufl., 1995, S.228 より引用者訳)。この方向の研究は, とりあえず G. N. Knauer, Die Aeneis und Homer, 2. Aufl., Göttingen, 1979 において集大成されたが, この大部の著作をもつてしても, 未だに見逃されている類似点は少なくない。
- 24) 前掲のクナウアーによる研究書には, 『アエネーイス』と『オデュッセイア』『イーリアス』(および第三の参考文献であるアポロニオス『アルゴナウティカ』)との複雑な対応関係をビジュアル的に図示した紙が一枚, 付録として添付されている。
- 25) 岩波文庫の松平千秋訳(下巻 402 ページ以下)による。
- 26) 細かく言うなら, 原文は τῷ δ' ἄρα πατὴρ ὕφ' ἕμερον ὥρσε γόοιο となっていて, 「老」という語は入っていない。
- 27) この顛末は, 逸身喜一郎『ギリシャ・ローマ文学——韻文の系譜』, 放送大学印刷教材, 2000 年(第二版)の『イーリアス』を扱った章(45 ページ以下)に分かりやすく解説されている。
- 28) 『イーリアス』第九巻にメレアグロスの怒りの話が挿入されていることを考えると, ホメーロス以前から「怒りと和解」という問題が文学のテーマになっていたのかもしれない。
- 29) 「ギリシア悲劇にみるギリシア的なものと非ギリシア的なもの」, 地中海文化を語る会編『ギリシア・ローマ世界における他者』, 彩流社, 2003, 93-127 ページ。
- 30) 前掲書 111 ページ。
- 31) Joachim Latacz, Einführung in die griechische Tragödie, Göttingen, 1993 は, 「オレスティア」を扱う章の最後で(130 ページ以下), 『慈しみの女神たち』の結びにこめられた主張を——いわゆる“Rom-Idee”(ローマ帝国の世界支配理念)からのアナロジーで——“Athen-Idee”と呼んでいる。「オレスティア」における正義の賛美は, 同時にアテーナイの賛美でもある。そしてこれは, この優れたアテーナイこそがギリシアの諸ポリ

スを指導・支配するべきだという形で、権力への志向を生み出すことになる（デーロス同盟からペロポネソス戦争への流れ）。国家の精神的な理念と政治的な要求が表裏一体をなすという点で、まさに後のローマ帝国の支配者イデオロギーと酷似した構造が見えてくるのである。

- 32) [] 内の意識部分も含め、橋本隆夫訳（岩波書店「ギリシア悲劇全集」第1巻、1990年）による。
- 33) 以下、『アイアース』からの引用は木曾明子訳（岩波書店「ギリシア悲劇全集」第4巻、1990年）による。
- 34) キケロ『友情について』59によれば、「いつかは憎むとおもって愛せ」という格言は古代ギリシア七賢人の一人ピアースのものだとする説があった。
- 35) *Homines enim ad deos nulla re propius accedunt quam salutem hominibus dando.* 引用訳文は久保田忠利訳（岩波書店「キケロー選集」第1巻、2001年）より。
- 36) *Animum vincere, iracundiam cohibere, victo temperare, adversarium nobilitate ingenio virtute praestantem non modo extollere iacentem, sed etiam amplificare eius pristinam dignitatem, haec qui faciat, non ego eum cum summis viris comparo, sed simillimum deo iudico.* 引用訳文は山沢孝至訳（岩波書店「キケロー選集」第2巻、2000年）より。
- 37) ウェルギリウスの生涯について、確かなことはほとんど分かっていない。ドーナトゥス（スエトニウス）などの伝記には、古伝であるとはいえすでに伝説的・創作的な要素がかなり入り込んでしまっているし、『牧歌』から作者本人の自伝的な情報を読みとろうとする試みは、すでに方法論的に過去のものとなっている。ウェルギリウスの伝記に関する最近の研究状況は、Horsfall 前掲書（注7）、1ページ以下を参照。
- 38) 原文は上記注20と注21に。
- 39) *pietas* は「敬虔さ」「敬神」「義務感」「信義」などいろいろな訳が可能で、ここの文脈では「信義」あたりが適切かと思えるが、あえて多義性を活かすため、原語のままにとどめておいた。